

立命館大学国際平和ミュージアム ミニ企画展示

発掘された京都の武器 2

- 京都師団が埋めた武器 -



第一六大隊跡・火炎放射器など出土状況の写真（西近畿文化財調査研究所提供写真）

2009年4月1日～4月17日

立命館大学グローバルCOE
日本文化デジタルヒューマニティーズ拠点（京都文化研究班）

はじめに

2008年から2009年にかけて、京都市伏見区西奉行所町で「伏見城跡・桃陵遺跡」の発掘調査が行われました。発掘された地点は、ちょうど、工兵第16大隊の跡地でしたから、それに関連する遺構や遺物もいくつか確認されました。今回、発掘調査を行った西近畿文化財調査研究所にご協力頂き、その成果の速報展示を行います。（木立雅朗）

1. 「軍都」としての京都

「京都」といえば一般には、アジア・太平洋戦争による影響が少なかった街である、とされています。京都がアジア・太平洋戦争で被った被害は、東京・大阪などの大都市圏に比べればごく軽微なものに留まりました。

しかし、近代の「京都」は戦争、軍隊と密接な関わりを持ちつつ発展してきました。明治維新後の1871（明治4）年6月、大阪に鎮台（のちの第4師団）が設置されると京都はその管轄下に置かれることとなりました。それ以降、終戦に至るまでの約75年間にわたって、今の伏見・深草一帯には軍隊が駐留し続けました。

また、京都及びその近辺から徴兵された兵員によって編成された部隊も、日露戦争中の1905（明治38）年に編成された第16師団が深草に駐屯したのをはじまりとして、昭和に入り戦争が拡大の一途を辿ると、第53師団・第116師団などの師団が続々と編成され、戦場へと送られていきました。なお、第16師団は、南京大虐殺を引き起こし、最後はレイテ島で「玉砕」したことで有名です。

現在も聖母女学院本館として利用されている第16師団司令部庁舎に代表される建築物群や、「師団街道」「第一軍道」などといった地名が、かつてここが「軍都」であったことを今日に伝えています。（小林史晃）

2. 工兵第16大隊の敷地

第16師団の一部、工兵第16大隊は、現在の伏見区西奉行所町地内に置かれました。工兵とは土木建築などの技術に特化した部隊で、敵の防御陣地や自然障害を破壊したり、爆破工作・塹壕掘り・地雷原敷設などを行う能力を持っています。師団が外地に出発すると、留守部隊が置かれました。終戦後には進駐軍の宿舎として利用されましたが、その後



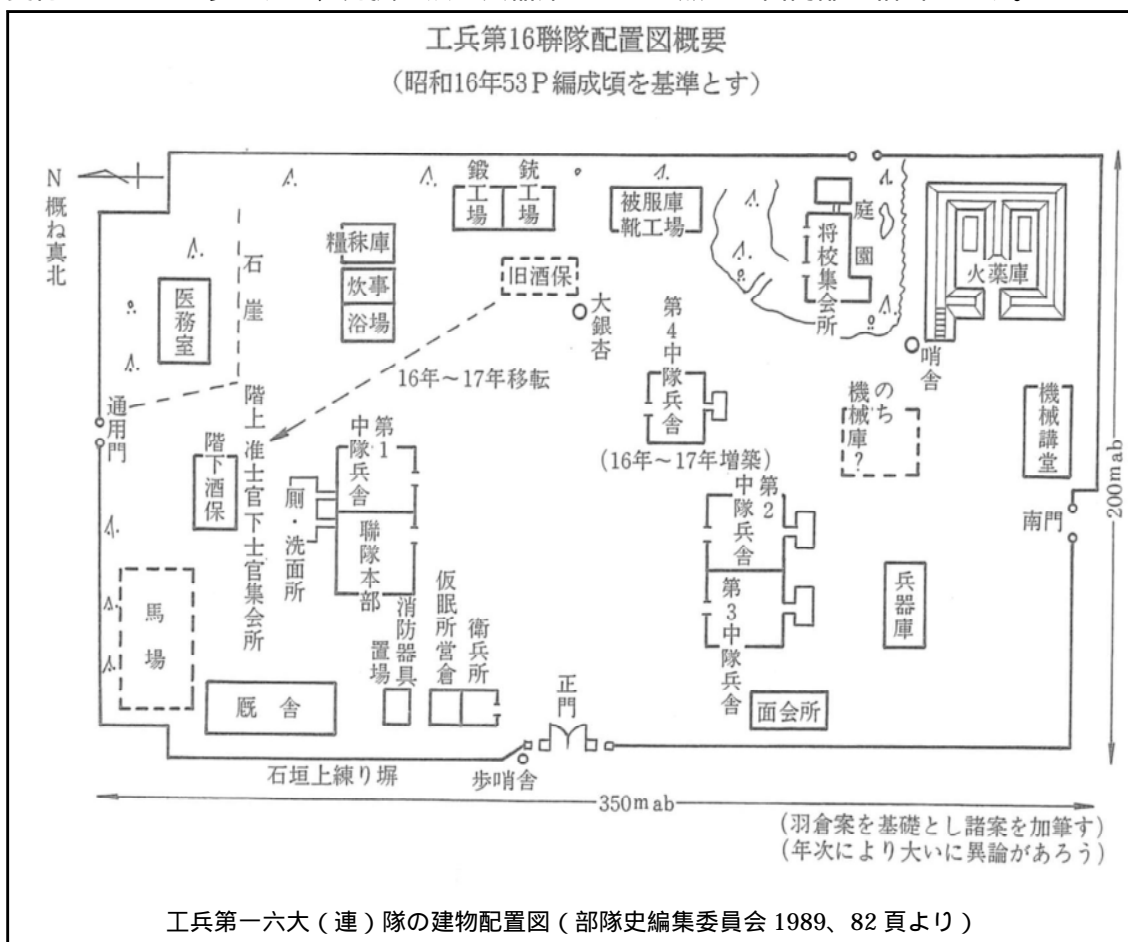
工兵第16大隊正門（『日本工兵写真集』より）

返還され、現在、京都市立桃陵市営団地と公務員住宅として使用されています。発掘調査は公務員宿舎の建て替え工事に先立って行われました。

このように、日露戦争後、この土地は工兵第16大隊とその留守部隊、終戦後は進駐軍、返還後は住宅に利用されたことがわかります。

『工兵第十六大（聯）隊史』には、当時の建物配置図が紹介されています。時期によって

変化があったようですが、発掘地点は兵器庫があった敷地の西南部に相当します。



3. 工兵第16大隊跡の発掘調査(伏見城跡・桃陵遺跡)

発掘調査は江戸時代以前の古い時代を中心に行われたため、近現代の遺構は必ずしもすべてが明らかになったわけではありません。また、公務員宿舎が建設されていたため、近現代の遺構はかなりの部分が失われていました。しかし、それでも建物の周囲をめぐる溝やレンガ積み基礎部分などが確認されました。

意味不明の遺構も多いのですが、レンガ建物の基礎



建物外周の溝



瓦積み基礎か



建物のレンガ積み基礎



木組みの基礎

は、兵器庫だと推測されます。発掘成果と『工兵第十六大(聯)隊史』で紹介された建物配置図を今後、さらに厳密に比較検討してゆく必要があります。

4. 出土した工兵第16大隊関連の遺物

(1) 曲げられた火炎放射器など(267・271号土坑)

曲がった火炎放射器と機関銃などが、鍵穴の形をした穴に折り重ねて埋められていました。出土状況から、土の圧力などで曲がったものでないことは明確です。おそらく、曲げて穴の中に埋めたのだと思われます。いったい、どうやって曲げたのでしょうか。

一緒に出土した小銃は、きれいに縦割りになって構造がよく分かるものでしたので、教材用の見本だった可能性があります。もしかすると、この穴は教材を捨てた穴だったのでしょうか。

この他、この穴からは銃弾も出土しましたが、危険なため、自衛隊が処理しました。

(2) 銃剣の鞘(さや)類(S-375号土坑)

銃剣の鞘や部品類をたくさん埋めた穴も見ついています。ところが、鞘と部品だけで、なぜか、それに伴っていた銃剣は一本しか出土しませんでした。その代わりに、槍先が何本か出土しています。

鞘は部品がはずれたものがほとんどで、組立て前の状態でした。おそらく、銃剣本体などは、武器として進駐軍に引き渡し、保管していた部品類などの半端なものを穴に埋めて処分したのだと推測されます。

(3) 薬品瓶

調査区の端で薬品瓶を多量に埋めた穴が出土しました。まだ薬品が残っている瓶もありました。また、薬品が青色に変色したものが多く見られました。発掘直後のため、まだ成分の分析などはできていません。ラベル類はほとんど失われていましたが、英語のラベルが残った瓶の破片もありました。成分の分析と合わせて、これが日本軍のものか、終戦後、進駐軍が残していったものだったのか、検討していく必要があります。

(4) 進駐軍の落とし物?

わずか二点だけですが、終戦後に入ってきた進駐軍のものだと思われるオーストラリアの硬貨が出土しました。いずれも小さな穴が開けられているため、調査者は軍服などに縫いつけられていたものではないかと推測しています。



267・271号土坑



S-375号土坑



捨てられた薬品瓶



硬貨(左:1942年、右:1943年)

5 . 工兵第 16 大隊の写真

京都教育大学の武島良成准教授は京都師団に関する研究をされ、関連資料も収集しております。今回、ご協力を頂いてその貴重な資料の一部を紹介します。



「正面ヨリ見タル工兵隊衛門」



「工兵総監閣下ヲ迎エタ工兵隊」



「松井師団長閣下ヲ迎エタ工兵隊 5.4.15」



「淀橋二於ケル門橋渡河」



左の拡大 岸辺の子供や鉄橋から見学する一般人



渡河の地、舟橋、河川観

「観月橋下流デ舟橋デ地方人ヲ渡ス」



二、障碍物越工、火敵

「敵火ニ於ケル障碍物越工 5.5.10」



築橋、交通之濠構築

「基本土工交通之濠構築 5.5.9」



破壊大ニ於ケル池長

「長池ニ於ケル大爆破」

上記の写真は武島良成氏が収集した『工兵在営記念』のアルバムから抜粋したものです。工兵の訓練の成果を民間人に見せている様子も分かります。日常的風景だけを撮影したものではありませんが、「渡河」や「舟橋」などは積極的に住民に公開しており、「障碍物越工」でも一番奥で住民が見物しています。とざされた雰囲気は感じられず、武島氏が文献史料から明らかにしたように「教練を含めた師団の日常が、居住する住民の目にもかなり触れて」いた様子がよく分かります（武島 2006、33 頁）。

おわりに - 終戦直後の京都と残された武器の行方 -

市内小学校から出土した曲げられた武器との関係 今回の発掘調査では、留守部隊が終戦直後に武器を埋めて廃棄したことが判明しました。各地の軍事基地では数量を確認した上で武器を米軍に引き渡しています。『工兵第十六大（聯）隊史』には「師団の指示に従ひ書類は焼却、兵器資材は英訳した書類を付して京都師団倉庫に入れ米軍に接收された」（部隊史編集委員会 1989、114 頁）と記述されています。今回発掘されたものは終戦直後、そうした正式な武器類とは別に捨てられたものです。教材用の見本や整備用の半端な部品類だったため、引き渡さずに廃棄した可能性があります。

ところで、火炎放射器や機関銃を曲げて埋めていたことは、とても重要です。じつは京都市内の小学校跡地から同じように曲げて埋められた武器が出土しています。進駐軍が来る前に小学校で行っていた教練用の武器を隠匿したのですが、今までは「曲げて使えないようにして埋める」のは民間人の発想だと考えていました。しかし、今回の発掘調査によって、軍隊でも同じことをしていることが分かり、小学校でも軍隊の指導や影響があった可能性もでてきました。戦時中や終戦直後の京都の人々の暮らしが軍隊と密接に関係していたことを示しているのではないのでしょうか。

戦争遺跡と「埋蔵文化財」 現在、近現代の戦争遺跡は「埋蔵文化財」として認定されない例がほとんどです。そのため、せっかく、発掘調査で出土した今回の展示遺物も、行政的には単なる「ゴミ」として解釈されようとしています。最近では、沖縄県だけではなく、各地で近現代の戦争遺跡が発掘調査され、埋蔵文化財として認定される例が増えてきました。しかし、京都府では対応が遅れており、多くの遺跡が放置され、破壊され続けてきました。

たかだか60数年前のことですが、発掘調査ではじめて分かることも多いのです。近年では語りべが少なくなり、アジア太平洋戦争の証言者は「人からモノ」へと移り変わりつつあります。人々の証言を集めるとともに、こうした貴重な考古資料も積極的に生かしていくべき時だと思います。また、京都師団は地元が重要な産業として誘致したものでした。師団街道は今でも重要な幹線道路ですし、伏見の酒造業の発展も、京都師団との関係を抜きにしては語れません。地元にとって、今も大きな意味を持ち続けています。

縄文土器や弥生土器は「埋蔵文化財」として大切に発掘されて保管されていますが、今回展示した遺物は、それと同じような扱いはされません。いったい、どうしてなのでしょう。

最後になりましたが、困難な状況であるにも関わらず、真摯に対応して下さった西近畿文化財調査研究所の村尾政人所長、貴重な資料を快く提供して下さった京都教育大学武島良成准教授に心から感謝の意を表します。
(木立雅朗)

京都市埋蔵文化財研究所による発掘調査で出土した武器類を、2007年1月に開催した当ミュージアム「第12回ミュージアムロード～知ったはる？京都のこと～参加企画知らなかった京都の戦争」展で展示しました。旧永松小学校では発掘調査で曲げられた武器が出土しましたが、聞き取り調査でも、終戦直後に地元の方々の手で埋められたことがわかっています。

[参考引用文献]

部隊史編集委員会編 1989 『工兵第十六大(聯)隊史』伏見工兵会

武島良成 2006 「京都師団の日常 - 文献史料による『戦争遺跡』の検証 - 」『京都教育大学紀要』 108

なお、4章は京都教育大学武島良成准教授から、それ以外の断りの無い遺跡写真は西近畿文化財調査研究所より提供して頂きました。



穴に捨てられた銃剣や金具

発行日 2009年4月1日

編集・発行 立命館大学グローバルCOEプログラム

「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」京都文化研究班

連絡問い合わせ先

立命館大学文学部「歴史考古学ゼミ」(担当:木立雅朗)

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学文学部

電話 075 - 466 - 3493 学芸員課程資料展示室

fax 075 - 465 - 8188 文学部事務室気付